

人格形成を促進する

玩具の機能的特性

三神 静子

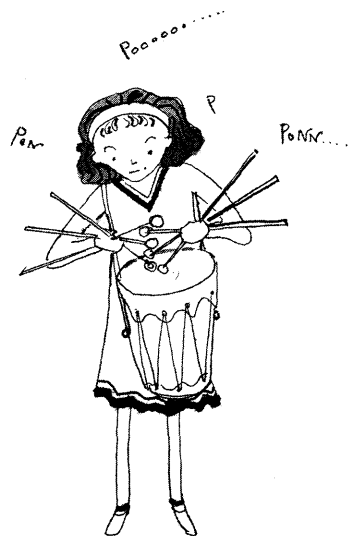
一 はじめに

「玩具文化」という小冊子が、玩具文化研究所（関係学研究所付設）から、一九八二年に刊行され始めている。扉文には、次のような「基調」が示されている。

“玩具文化の探究である。玩具劇場の開設である。

おもちゃのドラマの開幕である。どんなおもちゃも登場する。たくさんのおもちゃが、ドラマ・トイが誕生するだろう。プレイ（遊び、劇）の世界（時空の舞台）をひろげよう。”

その創刊基調論文には、「玩具学の提唱ーいと小さ



き『もの』に宇宙を読む」が本田和子によって書かれている。「手足の延長として、人々に密着して生活を共にしながら、簡単に捨てられて姿をとどめにくい、細々としたものたちを、先ずは、収集し、整理して、物をして語らしめる」ことに努めねばならない」とする「民俗学」への視点が挙げられ、「その片隅の営みの中にこそ、民衆の血の通った生活が姿を現わし、人類の生きた歴史が立ち現われるのだ」と述べられ、そして、「玩具、このいと小さきものたち、それらをめぐる営み」のありようを開示する「玩具学」

の提唱がなされている。

本文のテーマである「玩具とかわる自己の性格形成」に関する構想は、早く、松村康平著「子どものおもちゃと遊びの指導」(保育学講座7・フレーベル館・一九七〇年)にみられ、「玩具文化」No.3(一九八三年)には、松村・三神が「玩具による性格の形成―自己活動と玩具のかかわり―」について述べている。本文では、それと共通の立場から、論述をすすめる。

二 玩具のこれまでの見方

(a)子どもの発達をまず考えて、それに玩具と合わせるといふ考え方。 (b)玩具に、文化財(タコとかコマ、わらべうたなども含めて)や商品としての玩具もいれて、それらと子どもとを合わせる考え方。 (c)玩具と子どもとがかかわることに於いて、子どもに育つ活動から、玩具の性質をみていく。その場合の活動とは、「手先を使ったり」「大きな声で歌いあげたり」「(紙芝居のようなもので)空想の世界に入ってい

く」といった活動を意味し、子どもの性格(後述)の形成がとり上げられているのではない。(d)玩具と子どものかかわり方の発達と、玩具の性質との関係で拓かれていく子どもの世界の道すじに、玩具を位置づけとらえるとらえ方、など。

三 本研究の立場と考察

本研究では、玩具との関係で、何が子どもに育つか、ということと、その性質が、人格形成をどう促進するかについて考察することが課題である。

○ 性格形成における玩具の役割

性格がどのように形成されていくかを云うためには、基礎的な統一のある理論が必要である。人間は誰でも、自分と人と物とが共にかわり合って生活ができていく。このような、自分と人と物とが共にかかわる「接在共存状況」において、性格の形成(人格の発達)が行われる。そして、接在共存状況を基盤として人間の生活が展開されていくが、そこでの人間のあり

方に、主として「自己」の顕在化するあり方がなされる場合、「自己と人」、「自己と人と物」、「人と物」、「物」の顕在化するあり方がなされる場合、などの五通りを類別できる。そしてまた、それぞれにおいて、それぞれ違って「性格の形成」（人格の発達）、自己の構造化がなされる。そのことに玩具がどのように役割を果すか。どのように構造化されている自己にとつての玩具であるか、同じ玩具でも、自己にとつてもつ意味が違ってくる。また、玩具の違いが自己の構造化の仕方を変えることもまた、あり得る。

○ 構造化する自己の性質

自己・人・物の接在共存状況における存在の仕方（かかわり方）から、構造化する自己は、次のように類別される。①同心的・内在的 ②同接的・内接的 ③交叉的・接在的 ④併存的・外接的 ⑤自存的・外在的 ⑥随所自在的 ⑦状況遍在的 などの七つの自己構造。

○ 自己とかわる玩具の性質

自己と玩具のかかわりにおいて顕在化する性質には、これまでの研究で明らかにされているものに45種類ある。これを次に列記する。

- ・ 危含性・軌道性・変様性・恒用性・併在性・孤立性
- ・ 共用性・間性・媒介性・疎外性・含有性・表演性・
- ・ 転位性・定位性・同時性・道具性・対応性・連携性・
- ・ 連結性・分離性・個有性・象徴性・展開性・縮図性・
- ・ 含蓄性・素材性・突発性・顕出性・出現性・浮遊性・
- ・ 遊動性・誘導性・表出性・役演性・機動性・伸縮性・
- ・ 変動性・変容性・変展性・拡散性・行動性・動作性・
- ・ 表現性・操作性・乗動性。

これは、かかわる自己の性質（構造）が異っても、あまり変ることのない性質である。というのは、自己がかかわる玩具の「向う側」には、玩具の「物」としての性質があるからである。自己とかわることににおいて顕在化する物の性質は、自己（または人）とのか

かわり方によって変わり得る。

この、自己（または人）のかかわり方によって、自己に成立する体験には、かかわり感情が伴われる。そしてこのかかわり感情から、それに対応する玩具の特性をとらえることができる。

以上の基本的な立場から、45種類の玩具の機能的特性が類型化され、それぞれに、自己の構造と対応する七つのかかわり方―①内在的 ②内接的 ③接在的 ④外接的 ⑤外在的 ⑥随所自在的 ⑦状況遍在的―によって成立するかかわり体験・感情を挙げることのできる（関係学研究・第15巻第1号・一九八七年）。

○ 研究事例

「個と集団の相即的發展をもたらす玩具の特性」から、これまでの基本的立場の理解を深めてみよう。

◎ 大なわとびの△つな△の場合

△つな△の活動空間において働く「軌道性」つま

り、その空間に軌道をつくる性質が発揮されて、集団に個の位置づく関係が明確になり、また、集団関係の構造化に働く性質「共用性」つまり、共に使われるところに働く性質によって、集団に順番性が形成される。そして、活動化を促進する性質「変動性」つまり△つな△の回転に伴う動きがつけられる性質が発揮されて、成員における役割分担化、すなわち、役割分化・役割連担・役割演出性などが生まれ、また、行為をもたらす性質「動作性」つまり△つな△の回転によって次々に飛ぶ行為を誘う性質が発揮されて、集団の連結構造化が促進される。

“大なわとび”における集団のかかわり構造において、個（自己）の内在的、内接的、接在的、外接的かかわり方などのされるのをとらえることができる。そこにおいては、多面的なかかわり感情体験が成立し、人格発達を促進することに関連して働く特性を見出すことができる。

*例えば、△つな△の機能的特性「軌道性」に対応

するかかわり感情には、(a)内在的かかわりをする場合
―きちつと一致した(ずれずにある)感じがする、(b)
内接的かかわりでは―軌道に即した動きや変化が感じ
られる、(c)接在的かかわりでは―軌道を修正すること
ができるように感じられる、(d)外接的かかわり方では
―軌道をなぞったり、見通しを立てたりできるように

感じられる、(e)外在的かかわりでは―軌道からはずれ
ていると感じる、(f)随所自在的かかわりでは―どの点
にもかかわって動き出せる感じがする、(g)状況偏在的
かかわりでは―どこにでも軌道をつくって振舞える感
じがする、などが挙げられる。

(玩具文化研究所)

一人ひとりのイメージの世界を表現する

モノとしてのおもちゃ

今井 和子



△はじめに▽

大人から見ると「遊具」も「玩具」も「教具」も少
ずつ違う意味あいであらえられています。子どもに
とっては、新聞紙も、洗濯ばさみもミニカーもぬいぐ
るみも、みんな興味のあるモノが「おもちゃ」なので

はないかと思えます。大人の定義とは無関係に、子ど
もたちの求めるモノを私は、「おもちゃ」と広義にと
らえて考えることにしています。

さて、「子どもたちにどんなおもちゃを与えたらよ
いか」ということが常に大人の話題や悩みになります